

## 南仏アヴィニョンフェスティバル参加報告 2014

2014年7月 花柳 衛菊

この湧き上がるような幸福感をどのように表現すればいいのだろう。午後1時からの自分の公演を終え、暑い外気を遮断した心地よい石作りの世界遺産のアパートに帰り、明日の公演のために衣裳を丁寧にハンガーにかけ、手洗いで洗濯をし、厚い肉のステーキと焼きたてフランスパン、濃厚なラ・フランスの100%果汁、とろけるようなカマンベールチーズ、完熟メロンたっぷりの昼食兼夕食を取る。そして、お気に入りの服を着て、芸人から厳しい目の観客に変身する。5時から私のアヴィニョンフェスティバルでの観ショータイムが始まるのだ。私の住んでいるアパートから3分の距離にフェスティバル主催のin劇場とoff劇場合わせて30以上があり、歩いて15分以内には129の劇場がある。off劇場はそれぞれがこだわりを持って厳選した5~60の公演を行い、朝10時から夜中の0時まで合計1300以上の公演がひしめいている。今日は何を見ようか。A4で395ページもあるプログラムやいろいろなうわさ、公演開始を待っている観客の状況から、面白そうな公演を探し出す。そして公演を見終わった後のこの満足感。あーいい公演だった。彼らはどれほどの準備をし、稽古をし、この公演にかけているか。独断で、仲間達との造語だが、一押し、二押し、三押し、普通、ダメ、の5ランク分けをする。一押し公演鑑賞後の幸福感は何ものにも替え難い。自分の公演ランクを考えず、夕方5時を境に昼のことは完璧に忘れてしまうのがミソだ。



全てのoff公演の写真が印刷されたシート

アヴィニョン off 公演のほとんどのシアターは大変狭く、ダンサーやアクターの汗が飛んでくるほどの距離で鑑賞する。演者は誠心誠意、自分の芸に人生を掛けている。生半可な中途半端な芸人はいない。そんな人たちがこの直径1.2kmの城壁の中に何千人といて、私もその同じ土壌に立ち、同じように公演をしている。考えただけで、身体の血潮が湧き、幸福感に満たされる。テレビ、新聞、パソコン、電話、スマホもないので、一日中舞台芸術一色の生活だ。道を歩いていると演者たちに出会い、あの公演のあのダンサーだ、えー違う人みたい、外で会う方が美人ね、などと寸評する。皆、自分の公演のチラシ配りに専念している。Thank you for good show! と声を掛けると皆とても嬉しそうな笑顔を返してくれる。ここではスターも肩書きも過去の実績もない。皆ただの芸人である。参加者全員が“まな板の鯉”のただの芸人、今年いい公演を提供したかどうかだけである。全員ただの芸人、これが私にとってこのフェスティバルに参加し続ける原動力かもしれない。



小学校のクラスも人形劇場に

時々おやっと思うことに出くわす。私の参加しているoffではなく、フェスティバル主催のin公演参加の日本人に会った時だ。かなりの人が無表情で、ちらしを渡しても無愛想な顔を返してくる。いったいどうして？ヨーロッパのフェスティバルに通って18年になるが、そのような思いをしたことは1度や2度ではない。今年だけで2度。地球を半回りしたような日本からはるか遠いところで、お互い励まし合いたいのに、彼らは冷たい視線を投げる。私の引け目？なんの引け目？inはオフィシャル公演なので費用や集客の心配はまずいらない。in公演チケットはいつも完売なのである。offの20~200人席の小劇場ではなく、500席以上で、高額の予算が組まれたとても豪華な公演である。小規模公演の私の引け目が彼らの態度に敏感に反応してしまうのだろうか。

今年は4人の落語グループが off に参加していた。彼らとは道で出会う度に声を掛け合う。こんにちは！がんばっていますか！今日は公演中突然停電になり、ラジオ放送でいきましたわ、ケイセラーセラー、ハッハッハー。もしかしたら、この落語の陽気な人たちと違い、大方の日本人は初めて会う人に笑顔で挨拶するのが苦手なのかもしれない。本当はとても愉快な人たちに違いない。日本ではほとんど報われない舞台芸術の苦勞をしている人にまず悪人はいない。間近で国際紛争が起きているヨーロッパではお互いの笑顔がとても大事だ。自分はある人の敵ではない、と初対面でも大げさに手を広げて挨拶し、こぼれるような笑顔を返す。そんな笑顔に慣れた私にはここで会う in 出演の日本人は少し寂しい。



町のあちこちで公演の宣伝活動をする

1300もの公演がある off を見ると、今の時代の人々の好みがよくわかる。あの大胆な動きに皆気持ちがスカッとするのか、極限まで身体を使うヒップホップ公演が大人気だ。私が鑑賞した公演48の内5つがヒップホップであった。その中で忘れられない一押し公演が「A l'Onbre de Core(影?)」。映像と人とのコラボレーション。錯覚が錯覚を生み、どれが映像かどれが生身のダンサーかわからなくなってしまふ。照明を当て壁に映っていた人の影がいつかダンサーと違う動きになり、それが映像であったとわかる。最初は確かに生身のダンサーの影が映っていた。しばらくして映像の黒い影がジャンプするとそこから飛び出してきたかのように生身のダンサーが踊り出す。次々に実像と虚像で観客を翻弄しながら二人の男性はしっかりと激しいヒップホップを見せる。最後の挨拶でダンサーの一人が映像を作ったことがわかる。毎日ダンスの事ばかり考えている人でなければこれほどのダンスと映像とのコラボはできないだろう。



町中に貼られたポスター

もう一つの一押し公演は台湾のコンテンポラリーダンスだ。いつも台湾はアヴィニオン中央の老舗劇場で立派な大道具を持ち込み、照明も凝り、多くのスタッフを使って、3~4つほどの公演をうつ。「Fabrication (製造?)」のセットは3つの扉が付いた大きなクローゼットだ。そこに入ったり出たりしながら女性1人男性2人が観客の目を欺きながら踊る。1秒1秒計算され尽くした3人の動きに、よくここまで振り付け、稽古をしたと感じ入ってしまう。動きも東洋的な繊細さと西洋的な大胆さが美しい。

ほとんどが三押し公演までに入る熟演の off 公演と違い、毎年 in 公演にはがっかりさせられることが多い。最先端であること、が in では大事な要素であるらしい。しかし今年は、一つの方向性を in 公演は示唆していたと思う。アートするダンス、肉体と共に変化するオブジェ、と言ったらいいたろうか。ダンス公演と銘打っているがダンスが主役ではない。身体ができていくダンサーなら、数回のリハーサルで本番に臨めそうだ。美術が舞台上にセッティングされてから動きの説明を受けたかもしれない。私が見た in 公演5つの内4つにはち密な振りはないし濃密な稽古も感じられない。美しい情景が提示されただけと言っても過言ではないと思う。ただ見たこともない美しさだったことは確かだ。法皇庁中庭のフェスティバルメイン公演も巨大な怪しく光るパネルの前を、ゆっくりと人の大きさ程の箱を押したり、斜めになったパネルの上を黒衣の女性が静かに歩いたり、筋肉質の男性がパネルに横たわり5分ほどしてから寝たまま飛び上がり音を奏でたり。舞台背後にそそり立つ宮殿の壁に投影された流れる滝、窓には白衣の人影、空には満天の星。美しく心地よい、が私の心は動かない。変化の乏しい場面を夜10時から2時間も見続けなければならぬ苦痛の方が大きい。美しい型を持っているダンサーがじっとして動かないと確かに美しいし静かだ、が訴えるものが少なすぎるし、即興のような動きは観客に語りかけてこない。動いて幽玄の静かさを演出する日本のお能を思い出していた。

ダンスの中で肉体を酷使するヒップホップが主流の今、もうこれ以上動くダンスとしての進化が望めなくなった。今年は off 公演ではアイデアと具象性に方向転換し、in 公演ではアートするダンス、変化するオブジェを提唱した。今までは、ダンサーがダンスを創り、身体を通して何かを訴えていた。近年までフランスダンスは意味より動きに主眼を置いていたように思う。しかし、今年は動きに意味付けをし、アイデアを盛り込んだ公演が目立つ。さらなる未来には、動きが主流でない今回の in 公演のように、演出がメインのダンスになっていくのだろうか。5つ見た in の作品で1つだけしっかりダンサーが創りこんでいた公演があった。日本人の Kosakatani Chinatsu と Clement Dazin 作のダンスだった。無音の中、直径 7~8 cm位の白く柔らかいボールを巧みに男性が操りながら女性と踊る。愛に熱中できない二人、何かと戦いながら生きる二人がうまく表現できていて、抽象の中に具象を盛り込んだ in ではめずらしい一押し公演だった。



今年のゲスト吉村章月さんと(右)公演直前に

私は 15 年間アヴィニオンフェスティバルに参加し続けてきた。私の公演劇場は、町はずれにあるホテルのパーティ会場に黒幕を張りめぐらした、アヴィニオン中で一番設備が整っていないであろう小さな仮設シアターである。中央から離れた集客が難しい場所だが、嬉しいことに、off の出演者達、パリや東京の劇場プロデューサー、in 公演の演出家、オーストラリアのクラウン兼演出家、宮崎アニメが大好きなスイスのアニメーター、日本でオペラの舞台美術を 10 年していたスイス人、ドイツの美術家とダンス教師等、多くの舞台関係者が来て、公演終了後に声を掛けてくれた。in で公演していたかわいらしいパリのダンサーはカラスの踊りが気に入り、今度日本に行ったときに教えて欲しいと言ってきた。彼女が踊る洒落烏が本当に実現するのだろうか。来年のソウルでの公演依頼も受けることができた。

そして思い至った。私がここアヴィニオンでやるべきことは、思いがけない踊りやアイデア等を提示することではなく、自分が数十年掛けて積み上げてきたものを淡々と披露すること。



アヴィニオン近郊のラベンダー畑

自分の作品を持って海外に行き、レベルアップし続ける off 公演を見、進化する in 公演を鑑賞し、未来の舞台芸術について論じ、世界の舞台関係者と交流する。そして私自身の次への課題を提示され、自分の来し方行く末に思いを巡らせる。毎年 17 日間もこんなアート満載の極上な日々を過ごす。

8 月は、10 月のパリの小さな劇場公演へ向けてスタートを切る。

フェスティバルのメイン会場の一つ、石切場での日本人の in 公演「マハーバーラタ〜ナラ王の冒険〜」はタクシー運転手さん、ツアーガイドさん、我が家の大家さん達にとっても評判がよかった。

●花柳衛菊 アヴィニオンフェスティバル オフ参加公演

Egiku Hanayagi Danses Japonaises

2014 年 7 月 11 日~25 日 13~14 時 Garage International Theatre

演目・ソロ三題

「雪女」	振付・演	花柳 衛菊
地唄「由縁の月」	演	吉村 章月
「洒落烏」	振付・演	花柳 衛菊

アシスタント：高橋広美

URL : [www.egikuhanayagi.com](http://www.egikuhanayagi.com)